

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

早大国語



【問題】（演習）

出典：『平家物語』／立教大学 法学部 98年

現代語訳

そうして、（小宰相殿が）宮中で立ち働いていらっしゃるうちに、場所も多いのに「=所もあろうに」、（女院の）御前に（通盛卿から）手紙を落としてしまった。女院は、それを御覽になつて、急いで（その手紙を）お取らせあそばして、お召物の袂にお隠しあそばして、「滅多にないものを手に入れました。この持ち主は誰なのでしょう」とおっしゃつたので（女院の）御前の女房たちは、すべての神仏に誓つて、「知りません」といつせいに申しあげなさつてばかりいた。その中で小宰相殿は、顔を赤くして何も申しあげなきらない。女院も通盛卿が（小宰相殿に）申しあげている「=言い寄つて=いる」とは以前から御存じでおいであそばしたので、そこでその手紙を開いて御覧になると、妓炉の煙の「=香の」香りもことに心ひかれて好ましく、筆遣いも並々ではない。「あまりにあなたが強情なものも、かえつて今では（軽薄な女性ではないと思われ）嬉しくて」などと、（相手への思いを）こまやかに書いて、（手紙の）末尾には一首の歌が（記して）あつた。

我が恋は……私の恋は、細谷川の丸木橋（のようなもので、多くの人に）何度も踏みつけにされて（川の水に）濡れているように、（私もあなたから何度も）文を突き返されて濡れている袖「=涙で袖をぬらしているの」だなあ

女院は「これは（相手の女性が）逢わない「=逢つてくれない」のを嘆いている手紙ですね。あまりに女が強情なものも、かえつて害「=恨みを買うこと」となるのに」（とおっしゃる）。

少し以前、小野小町といつて「=という人がいて」、外見や顔立ちが世に（ないほど）すぐれていて、（男女の）情けの道がめつたにないほど（すばらしいもの）だった「=恋愛に通じて情がこまやかな歌を詠んだ」ので、（彼女を）見る人や、（その噂を）聞く者は、（彼女に対する思いで）心を苦しめないということがない。でも、つれない（という）評判が立つてしまつたのか、晩年は男の（彼女への）

思いの積もりで「『男の恨みが積もり積もって』、（吹いてくる）風を防ぐ方法もなく、（降つてくる）雨を漏らさない手段もない「零落してあばら屋に暮すことになつてしまつた」。（荒れ果てた）宿に曇らない月や星（の光）を涙に浮かべ「さえぎる屋根もない家で射しこんでくる月や星の光に涙し」、野原の若菜や沢の根岸を摘んで、はかない命をつないでいた（そうだ）。

女院は「これは必ず返事がなければなりませんね「お返事しなければなりませんね」」と（おっしゃつ）て、もつたいなくも御硯をお申し付けになつて、御自分でお返事をお書きあそばした。

ただたのめ……ともかくあきらめないでください。細谷川の丸木橋も、（多くの人が）何度も踏んで（いるうちに）落ちないはずがありましようか（。同じように、彼女もあなた的情にほだされて、そのうちにきつと色よい返事をすることでしょう）。

（通盛の）三位は、この女房「小宰相殿」を妻に迎えることを許されて、（二人は）互いに（相手への）気持ちが浅くはない「互いに深く愛し合つていた」。それで、（その後平家一門が落ちのびてゆく）西海の旅の途次や、舟の中、波の上の暮し（に至る）までも（彼女を）引き連れて、最後には同じ（冥土への）道に赴きなさつた。

訳注

○妓炉……本来は、香炉の一種のこと。

○同じ冥土への道に……通盛は将軍として戦の最中に討たれ、その報を聞いた小宰相は悲嘆にくれて入水する。ここでは、二人がほぼ時を同じくして死んだことをいう。

解答

- 問1 (イ) 奥ゆかしく〔5字〕／好ましく〔4字〕
(ロ) 頬立ち〔3字〕
(ハ) 方法〔2字〕／手だて〔3字〕
(ニ) はかない命〔5字〕
〔いずれも解答例〕

問2 4 問3 達者である〔5字・解答例〕

問4 2

問5 恨み

問6 文・踏み

問7

3

問8 死ぬこと〔4字〕

問9 小宰相が通盛に逢おうとしないことで恨みを買つてしまわないよう、自ら返事を書いて仲を取り持つこと。

〔48字・解答例〕

現代語訳

昼ごろ、(賀茂) 川の水が増しているというので(心配して)人々は見に行く。宮も御覽になつて、「今どうして(いらっしゃいますか)。(私は) 大水を見物に行きました。

おほ水の……大水が川岸を浸していますが、その深さに比べてみても、愛の深さという点では、私のほうがまさっています

そんな私の心を御存じでいらっしゃいますか。」と(お便りが)ある。(その)御返事、

今はよも……「(そんなことをおっしゃつても) いまはまさかお越しにはなりますまいよ。大水のような深い心は、あの川のよう
にあれほどまで深いのだと(私に)思わせておいて

(口先ばかりでは)つまりません。」と申し上げた。(その式部の返事を読んで、あわてて宮は式部の家に)お出かけにならうとお思い
あそばして、(衣に)香をたきしめなどさせておいでになつたところ、侍従の乳母がお側に上がって、「お出かけあそばすのはどちらへ
(でござりますか)。この(和泉式部などという女房風情の女との恋のこと)については人々が(あれこれ)申しているそうですわ。(お
相手の女は)これという尊い身分(の者)でもありません。(宮さまが侍女として)お使いあそばそうとお思いあそばすような(者)
は皆、(このお屋敷へ)お召しになつてお使いあそばせばよろしいのです。(対等の恋人のところに通うようなかたちでの、お忍びの)
軽はずみなお出歩きは、まことに見苦しいことです。とりわけ、(あの女の家は)男たちが数多く出入りしているところです。(宮さま
がいつまでも通つていらつしやると)不都合なこともきっと起こつてしまいましょう。だいたいよくないことはみな右近の尉のなん
とかいう人がやりはじめる事なのです。亡き兄宮さまをも、こ(の右近の尉)がお連れ歩き申したのでした。夜も夜中もとお出歩き
あそばしては、よいことがありますようか(あるはずがございません)。このような(御外出)お供をして歩きまわるような者は、
(わたしから) 大殿(の道長さま)にも(困った者だと)申し上げましよう。この世の中は(次の東宮がだれになるのか)今日明日とも
知らず変わつてしまいそうな様子ですのに、(また) 大殿がお心に決めておいでになることもありますのに、世間の情勢を見届けて
おしまいになるまでは、このよう(軽々しい)お出歩きはあそばしまさぬほうがよろしいでしよう」と申し上げなさるので、(宮は)

「（私が）どこへ行こうか（どこへも行かないよ）。することもなく所在ないので、とりとめもない気晴らしをする（だけ）の（こと）だ。ぎょうぎょうしきそなが言うほどのことでもない」とだけおっしゃって、「（あの女は）不思議なほどつれない女ではあるが、だからといって、まったく取るに足りないなどというほどの女ではない。呼び寄せて（ここに）置いておこうか、どうしようかしらん」と（宮は）お思いになるが、そうしたところで（以前よりも）いつそう聞こえが悪いであろうと、あれこれ思い迷つておいでになるうちに、（二人の間は）疎遠になってしまった。

解答

問1 A = きし

B = 岸

C = 来し

問2 (2) = (イ)

(3) = (ア)

(4) = (イ)

問3 ③

問4 都合のよくなない」ともきっと起きて参りますでしよう

問5 うこんのじょう

問6 (エ)

問7 式部（和泉式部）

問8 (ウ)

解説

問1 和歌の修辞法に関する問題。この手の問題の中で『掛詞』についての知識とセンスを必要とする問題は非常に多い。『掛詞』や『縁語』は『古今集』からの『八代集』の時代にもっとも盛んになった修辞法であるが、三十一音節の制限の中で豊富な内容を表現するための必須技法であり、その重要性は極めて高い。『掛詞』や『縁語』は一種の「しゃれ」もあるので、言葉に対するセ

ンスが最終的な拠り所になるとも言えるが、受験生としてはセンスなどに頼るわけにはゆかない。以下のようない観点で補うことができる。

1 前後の散文部の文脈にヒントを探す。

2 多用される掛詞のパターンを憶える。

1については、一般的な読解力が前提になる。2に関しては多くの市販の単語集等に整理されているので、それらを参照のこと。本来は1の力を伸ばしてゆくべきだが、現実的には、その前提として2の力を身につけておくことが1にも大いに資するものである。代表的な掛詞は憶えておくことを強く勧める。

まだ掛詞に慣れていない諸君もあるかもしれないが、この問題に関しては、文脈からの判断のみで解答してみよう。まず、傍線の施してある歌とその前の歌が、恋人同士である宮と和泉式部の「相聞歌」になつていることは明らか。相聞歌を含む「贈答歌」において、返歌では贈歌の中で使用された言葉を使って、それを表現のポイントにするのがマナーである。したがって、この問題の場合は、「きし」が掛詞になつていると考へるのが順当である。これについて、二つの意味を考える。一つが「岸」であることは明らか。また、相聞歌においては掛詞の一方が自然の風物であれば、他方は男女関係に関わる言葉であるのがお決まりのパターンである。そして、文章全体の内容から最近この二人の関係はやや疎遠になつてることが窺われるから、「きしもせじ」は「最近あなたは来ない」という意味だと考えられる。このことから、掛詞のもう一方の意味は「来し」となる。

問2

現代語訳の選択式問題。現代語訳の問題は、『文法→語彙→文脈』の三つの観点からこの優先順位に従つて総合的に判断をして答えるものであるが、選択式の場合は、そのうちの一つか二つの判断だけで解ける場合も多い。各選択肢の共通点や相違点に注目して、効率よく選択しよう。

傍線部(2)は、「たき物」がキーになる。この言葉は「お香」を意味する。平安時代の貴族には「陰陽道」に基づいて頻繁には入浴できなかつたので、臭いを「まかすための手段として「香」が発達した。部屋中に香りを充満させたり、出掛けに衣服に匂いを染み込ませたりした。したがつて、選択肢(イ)、(エ)、(オ)が正答の可能性を持つが、この場面で宮は出かけようとしているのだから、当然、選択肢(イ)が正しい。

傍線部(3)は、「やうごとなきは」がキーである。「やうごとなき」は「やむごとなき」の音韻変化としか考えられない。「やう

「**ど**」という名詞は存在しないし、「やう」を「用」等の名詞と考えると「**ど**となき」という無意味な形容詞（らしきもの）が残ってしまう、これまたナンセンスだからである。「やう^どとなき」が「やむ^どとなき」だとすると、「捨ててはおけない・高貴な」の意味であるから、解答は選択肢**(ア)**ということになる。

傍線部(4)は、傍線部**(3)**から侍従の乳母は宮の女遊びをたしなめていることがわかる。宮は（後の「殿のおぼしおきつることもあるを」云々から推測されるように）皇太子候補ともあろう人である。それが軽々しく女房風情の女と交際するのは見苦しいと、乳母は言いたいのである。したがって、解答は選択肢**(イ)か(ウ)**ということになるが、選択肢**(ウ)**では女のもとへ通うことを奨励していることになるから、不適切。よって、解答は選択肢**(イ)**ということになる。なお**(ア)**については、「見苦しい」のは傍線部の前では宮の態度を言っているのに、傍線部では場所にすりかえられてしまうので不適。この「そ」は情況全体を指すものと考える。

問3 傍線部**(a)**の「**む**」はもちろん助動詞の「**む**」であるが、ここでは連体形で下に体言を伴っているから、いわゆる《婉曲／仮定》の意味である。したがって、他の傍線部の中から同じ上接、下接をするものを選択すればよい。したがって、傍線部**(3)**が正解。
①は形容詞本活用連用形に接続するので係助詞。②は引用の格助詞「**と**」が続くので文末表現に等しく、④・⑤と同様に「意志」の意味である。

問4 「**びんなし**」は「便なし」で「都合が悪い」、「まうづ」は謙譲の補助動詞。「なむ」は上接するのが「來」なので、連用形なのか未然形なのかわからないが、都合のよくないことが起つてほしいと思うはずもないで、《説え》の終助詞と考えるわけにはいかない。したがって、《確定+推量》の複合助動詞どみなすしかない。よって、「きっと……だろう」の意味になる。以上をまとめて解答を得る。

問5 難読語の読み方の問題。「うこんのじょう」と読む。「うこんのい」ではない。この手の問題は出現するものがかぎられているので、市販の単語集などで頻出語句を確認しておけば十分である。

問6 同音異義語の問題。文中でその言葉が持たなければならない意味を確定させれば答はおのずから明らかである。ここでは下に

「ありく」があることから「連れて」という意味になると考えられる。したがって、選択肢(E)が解答になる。

なお、(ア・エ)はワ行上一段「ゐる」、(ウ・オ)はヤ行上一段「いる」、(イ)は「いれ・て」と読みラ行下二段「いる」、(カ)は「いえ・て」と読みヤ行下二段「いや」、(キ)は「いて・て」とタ行下二段「いつ」である。

問7 乳母が「あんな女はおやめなさい」と忠告したことに対し、宮が「あの女は……」と考えた心中部の言葉だから、傍線部(c)の表す人物はその女でなければならない。ではその女とはだれか。注の二つ目に明記されているように、その女は和泉式部その人である。

なお、『和泉式部日記』は一応「日記」とされるが、問題文にも見られるように、宮邸の様子や宮の心中など、式部にはわからぬはずのことが客観的に描写される点で、物語的な作品でもある。選択肢中に「作者・筆者」などが見えないときは、固有名詞で書くのがよいだろう。

問8 この文章の後半が、宮と乳母の対話になっていることは明らか。よって、傍線部(7)の主語はその両人のどちらかである。ところが、12行目で「聞こえたまへば」と二方向敬語を使っている点から、兩人とも敬意の対象となつており、傍線部が最高敬語ではないことから、敬語だけでは主体が決定できず、文脈によつて判断せざるを得ない。ここでは「女を呼びておく」ことについて、外聞を気にして悩んでいることがわかる。乳母なら7行目「使はせたまはむと……召してこそ使はせたまはめ」と勧めているくらいだから、悩むのは宮だと判断できる。

【問題】（演習）

出典：『今物語』「二四 東山の女」の全文 / 上智大学 文学部 97年

現代語訳

東山の片隅に、荒れ果てて人も姿の見えないあばら家に、たいそう上品で美しく、まだ世間ずれしていらない女がいたのだった。庭の荻原が招くけれども風以外には訪れる人もなく、軒端の雑草は茂るけれども杉木立ではないので（人が心ひかれるわけもなくて、茂つた）かいもなく、（秋の）月に（接しては）物思いにふけり、嵐に（接しては）恨み嘆いて（いるにつけて）も、心を傷める機会は多く、（春の桜の）花を見、（夏の）ほととぎすの声を聞いても、気をまぎらわすことのできることはめったにないことで、（夜を）明かし、（日を）暮らすうちに、清水詣での機会に、思いもかけない（男女の仲をとりもつ）おせつかいがおこって、行き届かないところのなかつた御治世で、（広い心で治めておられた帝に、女は）たつた一夜の夢のような契りを結び申し上げてしまつたのだった。これも前世（からの因縁）だと思うと、もつたいなくは感じられるものの、直面する現実としては嘆かわしく、その上恨みがましい気持ちにもなり、心中には晴れるひとときもない。どうしようもなく生きつづけてはいるけれども、もう一度（会いたい）という言葉だけの（帝の）御愛情でさえ待ちかねて、（女は）「ええい、ままよ、このために出家しなければならないつらい世の中だつたのだなあ」と決心して、かつての（取次ぎ役だった、帝の）御知り合いのところへ送つた（歌）。

なかなかに……かえつて（帝が）音信をよこさないのも（私にとつては）嬉しいことだというのは、つらい俗世間を捨てて出家する機縁であつたからなのだなあ

とだけ、奥ゆかしく幼さを残した筆跡で、薄い藍色の上質紙を、色の濃いのや薄いのを重ねたものに書いてあつたので、（御知り合いが）折りを見計らつて帝に申し上げたところ、「ほんとうにそのようなことがあつた。訪れなかつた（私の）配慮のなさよ」と、（帝の）御意向があつたので、（御知り合いが）すぐに走り向かつて（女を）探すと、そうでなくてさえ荒れ果ててゐる家で、人が住んでゐる気

配もない家なので、（御知り合いは）少し長い間うろうろ探して、年老いた女一人を探し出して事情を詳しく尋ねたところ、「どういう理由かは知りません。女あるじは天王寺へ御参籠になつてしましました」というので、（御知り合いは）すぐにそこから天王寺へ参詣し、（寺域内の小さな）寺々を探すと、亀井の辺りに年配の落ち着いた尼が一人、女房が二三人いる中で、たいそう若い尼で、特にぎこちない様子の尼がいる。（その若い尼は）この知り合いを見つけて、驚きあきれた様子で、ただただそのままうつぶせになつて泣いてばかりいる。そばにいる者たちも、声を立てないだけのこと（本人にも）劣らないほど袖を絞つ（て泣い）たので、御使い（である御知り合い）も見捨てて帰ることのできそうな気もしない。年配の尼は、この女の母であったので、（御知り合いが）事情を詳しく尋ねたけれども、（母親は）「もともとこの（出家する）ことは（娘が心に）思つていたことです。どうしてあの御方〔＝帝〕のせいにございましょうか（いいえ、帝のせいではありません）。恐れ多いことです」と最後まで言うこともできずに泣いて、その後は答えたかったので、（御知り合いは）「（おせつかいに女を帝に御紹介して）つまらぬ御使いをして、気の毒な有り様を見ることになつたよ」と悲しく思うものの、だからといってここでいつまでも過ごすわけにもいかないので、（帝のもとに）引き返した。この事情を帝に申し上げると、（帝は）「中途半端な気持ちのかけ方をしてしまつたなあ。私の心配りの足りなさが、罪となつてしまつたことよ」と（おっしゃつ）て、そのままどうしようもなく終わつてしまつたのだった。（帝の女に対する心遣いは）しみじみと感動的でも、情け深くもあり、長く人々の間で語り草になつたのだった。

解答

問1 工

問2 ア

問3 ア

問4 イ

問5 ウ

問6 工

問7 ウ

問8 (a)＝ア
(b)＝ウ
(c)＝イ
(d)＝ア
(e)＝工
(f)＝イ

【問題】（自習）

出典：『撰集抄』卷五第七「徳大寺の大臣殿西山に住む僧を召さるる事」／同志社大学

現代語訳

最近、西山の麓ふもとに、形ばかりの庵を造つて、ただ一人で住んでいる僧がいます。身にまとう麻の衣の他は、仏像と手持ちの経本より他は、持つているものがないので、まったく俗世の人には知られず、（他人の生活を）侵すこともない。経の文章を知つていることを示さないので、自然と（誰かが）訪れたこともなく、どこの人とも知られないので、話をしに参る仲間もない。どのようにして露のようにはかない命を支えたのだろうと、いよいよ気がかりであります。

このこと（について）、世の中にこのような僧がおりますとうわさしておりましたところ、徳大寺の大臣が、「いやまあ、どのような僧だ。呼び寄せなさい」と言つてお呼び出しになると、お返事をさえ申し上げなさらなかつたので、使者は理不尽なことと感じて、このことを（大臣に）申し上げると、（大臣は）「きっと訳があるはずだ。ただ召し出して参れ」と言つて、重ねて人をお遣わしになると、（僧は）この庵を引き払つて、行方知れずになつてしまつた。それでも、戸の中を開けてみると、そばの板にこのように、

すぎ行きし……過ごして來た過去も悔やまれる柴の庵だなあ。自分の住処としてどうして柴を折り取つて、自分の物にしてしまつたのだろうか

と書き付けて、（本人は）跡形も見えない。

この歌の意味を大まかに理解してみると、この聖は、庵を自分のために思つて自分の持ち物にしたようなことを後悔しているのだろう。まったく何も持たないのに、つまらない一時的な庵を造つておいて、我が身をここに置くために、思つてもいないこと（＝大臣からのお呼び出し）を聞くことの煩わしさよと詠むのだろうか。この人はどんなに心が澄んでいらっしゃつたのだろうか。何も無かつたならば、どうして少しでも執着することがあるだろう。山深くに住んで、心に執着さえもございませんなら、どうして（心が）澄まないはずがあろうか。心が乱れるのは、妻子珍宝のためである。これを見ては欲しいと思い、あれを見てはねたましいと思つていると、心がだんだん乱れて、眞の悟りは起こらないそだとか聞く。それに、自分自身の他には物も持たないで、ほんの小さな住処（を持つたこと）までも後悔するほどの心がけは、本当に、さぞかし潔かつただろう。本当に本当にうらやましいことでござります。

それにしても、この人は、まさかまた柴の庵を造つてはいらっしゃらないだろう。どの山の峰、どのような野のそばにいらっしゃつて、本来の念願通りにいらっしゃったのだろうかと、（聖の）過ごした日々をたいそう知りたく思います。ああ、最近のことでございますので、そうはいってもやはり世の中はこの空の下以外の世界はないだろうから、探し求めて、少しでも（その聖と）きつと縁を結ぼうと思われる。

解答

問1 a 5 b 4 問2 A 3 B 2

問3 5 問4 3

問5 2 問6 3・5

問7 一切の物に執着しない、同時代の僧の潔さに憧れを抱いたから。〔29字・解答例〕

問1 a 「あやなし」は〈筋が通らない・わけがわからない〉の意味。ここでは大臣からの呼び出しに返事もしない僧を、使者が〈理不尽だ〉と思っている。b 「ゆかし」は〈見たい・聞きたい・知りたい〉の意味。

問2 A 「いかさまにも」は〈きっと〉の意味。「様」は〈詫わげ・理由〉の意味。B 「何とてか」は〈どうして〉の意味。選択肢にはないが、本来ここは反語で〈どうして少しでも執着することがあるだろうか、いや、ない〉と訳すべきところである。

問3 選択肢を見るポイントは、傍線部の意味と、省略されている主語をどう読み取るかである。まず傍線部の意味を確認すると、「いかにしてかは」は〈①どうして・どのようにして（疑問）②どうして……か、いや、ない（反語）③なんとかして（願望）〉、「露の命」は〈露のようにはない命〉、「おぼつかなし」は〈①はつきりしない②気がかりだ〉である。傍線部の前の部分では、「僧」の貧しい生活を紹介しているから、この主語は「僧」であり、傍線部の前半は〈僧はどうやって露のようにはない命を支えたのだろうと〉と訳せる。後半は、「おぼつかなく」思つたのが誰なのか、問題文にははつきりと書かれていらないが、選択肢の中で「おぼつかなく」を正しく訳出しているのは4と5のみである。4は前半の主語が違うので、正解は5だとわかる。

問4 まずは和歌を直訳してみよう。「すぎ行きし方」は〈過ぎて行つた方角〉、つまり〈過去〉を表す。「来し方」とも言う。「行く末（＝将来）」と一緒に覚えておこう。「たまる（手折る）」は〈花などを手で摘み取る・折り取る〉という意。この歌では掛詞になつており、〈柴を手で折り取る〉と、そこから派生して〈庵を自分の物にする〉という意味でも用いられている。歌の訳は〈過ぎして来た過去も悔やまれる柴の庵だなあ。自分の住処としてどうして柴を折り取つて、自分の物にしてしまつたのだろうか〉となる。つまり僧は自分の過去を悔やんでいるのである。しかし、具体的に何を後悔しているのかは、この歌だけからではわかりにくい。そこで次の段落を見ると、「この歌の心をおろおろ心得るに……」と、筆者が和歌の解説を試みていることがわかる。「すべて何も持たざるに……（＝まったく何も持たないので、つまらない一時的な庵を造つておいて、我が身をここに置くために、思つてもいなことを聞くことの煩わしさよと詠むのだろうか）」と僧の心情を推測している。ここでの〈思つてもいないこと〉とは、大臣からの呼び出し、を指すと考えられる。つまり、一人世俗との交際を断ち切つて仏道に励んでいたのに、柴の庵をつくつてしまつた。

まつたために居所を知られ、大臣からの呼び出しなどを受けて俗世の人と接触することになったことを悔やんでいるのである。よつて正解は3である。

問5 「れ」は①受身・尊敬・自発・可能の助動詞「る」の未然形・連用形か、②完了・存続の助動詞「り」の已然形・命令形、のどちらかと考えられる。設問では「文法的意味・用法の同じもの」を選べという指示があるので、まず、接続する語から①か②かを判断した後に、文脈から意味まで考える必要がある。

「る」は四段活用・ナ行変格活用・ラ行変格活用動詞の未然形に接続し、「り」はサ行変格活用動詞の未然形、または四段活用動詞の已然形（命令形）に接続する。傍線部の「れ」は、四段活用動詞「遣はす」の未然形に接続していることから、助動詞「る」の運用形であることがわかる。徳大寺の大臣が僧のもとに〈人を派遣なさつた〉という尊敬の意で用いられている。

3は、尊敬の意の四段活用動詞「給ふ」の已然形「給へ」に接続しているため、完了・存続の助動詞「り」だとわかる。よつて不適当。それ以外の選択肢は、四段活用動詞の未然形に接続していることから、助動詞「る」だとわかる。順番に意味を見ていく。

1は〈(大切に)思われる人と(大切に)思われない人がいる〉と訳せるので受身の意。

2は〈物を申し上げなさるな〉と尊敬の意で訳せるため、これが正解。

4は間違えやすいが、「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で、心情を表す語であるため、接続している助動詞「れ」は尊敬ではなく、〈ただ自然とお思いになる〉と訳す自発の意である。

5は〈経も読むことができない〉と訳せるため可能の意。

問6 順番に選択肢の正誤を確認していく。

- 1 德大寺の大臣が僧の後ろ盾になりたいと思つたとは一切書かれていない。
- 2 僧を訪ねたのは、徳大寺の大臣ではなく、使いの者なので誤り。
- 3 問題文の「夢にも人の主に知られて、をかす事なし」（2行目）に合致する。よつて、これが一つ目の正解。
- 4 問題文には「法文を知れるよしを示さざれば」（2行目）とある。「知れる」の「る」は存続の助動詞「り」の連体形だから、

こは〈経の文章を知っていることを示さないので〉と訳せる。つまり僧は、経の内容を知らなかつたのではなく、知っていることを誰にも言わなかつたのである。また、本文には「不審に思われた」とする記述もないのに、4は誤りと判断できる。

- 5 問題文の「山ふかく住みて……まことのさとりはおこらぬなるとかや」(13～15行目)に合致する。よつて、これが二つ目の正解。

6 問題文には「この人は、よもまた柴の庵をも結びていませじ」(18行目)とある。「じ」は打消推量の助動詞だから、筆者は、僧がまた柴の庵に住むことはないだろうと思つてゐる。よつて6は誤りである。

問7

まずは傍線部の現代語訳を確認しよう。「いささか」は形容動詞「いささかなり」の語幹用法で「少しの」という意味。「結びなむ」「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は意志の助動詞「む」の終止形で、「結びなむ」は「きつと結ぼう」と訳せる。筆者は、この僧を〈探し求めて、少しでもきっと縁を結ぼう〉と思ったと記しているのである。では、そのように記した理由は何か。その前の段落で、筆者は一切の物にまったく執着しない僧の生き方に対して「げにげにうらやましくぞ侍る」と記している。この部分が解答の核となる。ただし、その僧が遠い昔の伝説の人物では探しようもない。傍線部の直前では〈最近のことでありますので、また世の中は自分が住んでいる世界しかないだろからとも書いている。僧が、同時代の人物だからこそ「広く尋ねて」縁を結ぶこともできるのだ。

●
メ
モ
●